

## 卷頭言

今から十数年前に書いた「立ちどまり」と題する小文を、私はつぎのように書き出している。

棟梁が仕事の途中で、「さあ、落着きたばこにしましうか」と、仲間へ呼びかけているのを耳にしたことがある。「一服」という代わりに、「落着きたばこ」といったのが、妙に心に残っている。永年の経験から得た生活の知恵とでもいってよいものが、このことばから感じられたからであろう。さまざまの刃物の使用にも、高い足場での作業にも、ひとりひとりが細心の注意を払わねばならない。とりわけ棟梁ともなれば、仲間の安全はもとより、作業の進行への配慮も怠るわけにゆかない。「落着きたばこ」は、このような心術と無関係ではあるまい。

これを前置きとして、西行が奥州行脚の途次詠んだとされる、

道のべに清水流るる柳陰しばしとてこそ立ちとまりつれ（新古今集、夏）

という歌を引用し、能因―西行―芭蕉と受けつがれてきた漂泊詩人の魂の系譜にふれる文脈を導いたことを、今改めて思い出した。そして、その結文として、つぎのような見解を記しておいた。

何物かに追い立てられるように、われわれ現代人は永い間駈足をつづけてきたが、今やはげしい息切れに苦しみはじめている。この辺で、故知にならって、「立ちどまり」の静かなひとときを持つことが肝要となった。冒頭に引いた棟梁のことは、そのことへの身近な啓示として受取られないだろうか。

「故知にならって」といったのは、西行も芭蕉も奥州行脚の折、一人のさらに先輩にあたる能因法師にならって、同じ「柳陰」にしばしの「立ちどまり」の静かなひとときを持ったであろう、という想定によるものであった。

このころ、舗道を歩いていると、若い女性がつぎつぎと駈足で私を追い抜いてゆく、それはすでに日常の街頭風景となってしまうたようである。大きな紙袋を引きずるようにしながら、駈け抜けてゆくハイヒールの後ろ姿は、どうひいき目に見ても美しいとはいえない、というよりも、実に貧相なものとして私を失望させるのである。「もっとゆっくり歩きましょう」と、若い女性諸君に呼びかけたくなる。何も杖に頼ってよぼよぼと歩いている老人に、付合ってくれといっていいのではない。背筋を伸ばして、さっさと追い越してゆくのは、若者らしい、いさぎよさと頼

もしささえ感じさせるであらう。

「もっとゆっくり」と呼びかけたくなるのは、心の落ちつきを失って、先を争って疾走(?)するかのような歩き方で、私の前を見る見る遠ざかってゆく若い女性に対してである。いや最近には、「雁が飛べば墓も飛ぶ」のことわざのように、中年女性の中にも、同じような後ろ姿を見かけることが多くなった。

世の歩みが慌しくなればなるほど、かえって静かな心と眼を失わないよう心がけたいものである。そうすると、たとえば、雨あがりの並木路の脇の水溜りに映った、雲の切れ間の青空の輝きに、ふと気づいて立ちどまることもあるだろう。そういうひと時を、若い女性諸君がおのずから持てるよう心がけてほしい、と切に願うものである。

(平成二・三)